

博物館だより

No. 15

企画展 「漢詩人・森春濤の遺墨」 もりしゅんとう

平成5年2月27日(土)～3月28日(日)



〔無題〕森春濤筆七言律詩 明治前期

桐団扇 板面三四×二七cm

一川衣帯濺簾波
 兩岸樓臺鎖綺羅
 木母寺邊栽柳好
 吾妻橋下繫舟多
 春風不斷煙花種
 夜月又聞桃葉歌
 殘宵欲尋前度夢
 墨沱光景澹雨花

一川の衣帯濺波、濺い
 兩岸の楼台綺羅を鎖す
 木母寺辺栽柳好し
 吾妻橋下繫舟多し
 春風断たず煙花の種
 夜月又聞く桃葉の歌
 残宵前度の夢を尋ねんと欲すれば
 墨沱の光景 澹雨沱たり

春濤の東京時代、隅田川の光景を詠んだもの。
展覧会では、このほかに自作の漢詩を揮毫した掛軸などを展覧します。

【展示室から】

企画展「漢詩人・森春濤の遺墨」

一宮市博物館では、去る昭和63年9月に、「生誕百七十年記念 森春濤とゆかりの詩人展」を開催しましたが、その後、森春濤研究家でもある市内の後藤利光氏から、永年にわたって収集された資料60点をご寄贈いただきました。このたび、そのコレクションの中から森春濤の作品を選んでご紹介するものです。

一宮出身の森春濤（1819.4.2～89.11.21）は、明治はじめの日本を代表する詩人でした。今日では、漢詩文学は衰退し昔日の面影を失っていますが、明治初期には、新聞・雑誌という新しいメディアにも支えられ、日本文学史上最高の隆盛期をむかえていました。そうした維新後の新しい気運の中で、新たな詩壇の開拓に努めた春濤の活動には目ざましいものがありました。春濤の詩は、甘美な憂愁を基調とした艶麗な世界を特徴としていますが、未だ本格的な近代文学の登場をみない頃、多くの読者の心をとらえ、いわば一世を風靡した流行作家であったといえます。そのような明治期を代表する漢詩人も、江戸時代には一宮・名古屋で過ごし、地方文化の土壌の中で文人精神を形成しています。本展を機会に、漢詩のすばらしさを再認識するとともに、その詩人を育んだ当時の尾張地方の文化の在り様を探ることができれば幸いです。

〈春濤の略歴〉

文政2年、一宮村下馬町（現本町4丁目）の医家に生まれ、自身も岐阜の中川氏に医業を学びましたが、むしろ美的世界への憧れが強く、15歳ではやくも華麗な漢詩「岐阜竹枝」を詠っています。その後、有隣舎の鷺津松隠・益齋^{しやういん えきさい}について漢学を学び、同門の大沼枕山・鷺津穀堂と学縁を結びました。さらに上洛して梁川星巖の門に入り、尊攘の志士たちとも交遊を重ねています。

幕末の激動期、友人には国事に奔走する者が多かった（穀堂もそのひとり）にもかかわらず、文人生活に徹し、文久2年（1862）飛驒に遊んで『高山竹枝』を編み、翌3年45歳の時、ついに医業を廃し名古屋桑名町三丁目に「桑三軒吟社」を開きました。名古屋での門弟は永坂石球・丹羽花南・神波即山^{かんなみ}・奥田香雨^{かげん}・永井禾原をはじめ百余人に及んだといわれます。

明治7年（1874）、56歳、東京下谷に「茉莉吟社」を起し、同8年『東京才人絶句』の編集、機関誌『新文詩』の創刊により春濤の詩名は一躍高まりました。ここに集まる門人は皆当時の才人で、東都の漢詩壇に吟社の果たした役割は大きいものがありました。春濤は明治22年に71歳で亡くなりましたが、その遺志は、子森槐南に引き継がれ、漢詩文の最後の煌めきをみせます。

講演会「森春濤と尾陽不休社」

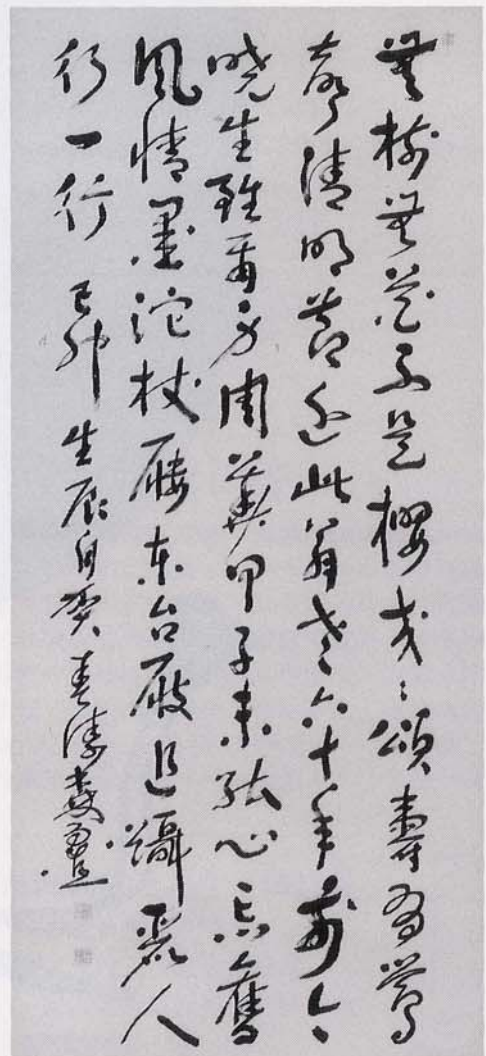
講師：南山大学教授 山本和義氏

期日：3月14日(日)午後1時30分～

場所：当館講座室



▲森 春濤



▲己卯生辰自賀 明治12年作

紙本 143.5×63.0cm

【資料紹介】

- 溪山晴楼図 昭和8年(1933)作 森半逸筆(左)
絹本淡彩 126.6×42.4cm
- 赤壁之図 大正9年(1920)作 森半溪筆(右)
紙本淡彩 136.0×32.8cm
- ともに岐阜市笹土居町森逸男氏寄贈

森半逸は、嘉永元年(1848)4月8日、葉栗郡島村(現市内島村)に森嘉助・いとこの長男として生まれ、本名は嘉兵衛、名は桂、字は子静、半逸・六々斎と号した。明治14年(1881)に家督を弟嘉六(半溪)に譲り、同24年(1891)岐阜の加納へ移った。村瀬太乙に詩文を、村瀬秋水に絵画を学び、のち京都の前田半田に師事して南宗画を修め、特に山水花鳥を得意とした。起(尾西市)の吉田稼雲の門人でもあった。日本美術展覧会、日本南宗画会、日本画会、全国絵画共進会などに出品し、特に明治38年(1905)の日本美術展覧会・大正2年(1913)の日本画会への出品作は宮内省御用品として買い上げられた。晩年は岐阜市笹土居町に住み、また、西柳ヶ瀬に十八楼を経営する従兄弟が北海道へ去ったのちこれを預かって楼主となり、自適に画筆を楽しんだ。昭和15年(1940)没、93歳。妻の出身が葉栗郡外割田村(現木曾川町)の川合玉堂の隣家であることから、幼い玉堂と親しく接したと伝えられ、玉堂が半逸から画についての影響を受けたことも充分考えられる。玉堂も出発点はやはり南画であった。

半溪は、半逸の弟で安政5年(1858)生まれ、本名は嘉六、別号に半景・無墨斎・希黄堂がある。明治14年、兄の半逸に代わって家督を相続。大阪の森琴石に入門し、のち半田の山本梅荘の門人となる。多くの展覧会に入選したが、晩年は書画会を主宰し東京本郷区千駄木に住んだ。昭和13年(1938)11月18日没、81歳。兄弟はともに、半田の山本梅荘と交友が厚く、南画の伝統を守った作家で、最後の本格的南画家のグループに位置づけることが出来る。

島村に住む本家では、明治23年(1890)「森嘉織工場」の創業者森嘉七の名があり(『新編一宮市史』)、その長男豊次郎(1870~1961)もまた泰石と号した画家であった。泰石についてはまた別の機会に紹介したい。この稿を成すにあたっては、森家ご子孫から貴重な資料のご恵贈いただき、また多くのご示教をいただいたことを記し感謝の意を表したい。

(毛受英彦)



▲森 半逸

【郷土史情報】

尾張大根について

過日、ある作品が当館へ寄贈されました（写真）。そこには、墨書で、「大根引大根で道をおしえけり、といふ一茶の句は山畑の瘦大根也、さてお国自慢、片手して引ける はなかりけり」と記され、文字の空白部分は大きく描かれた大根の絵をもって「大根」と読ませる構図となっています。軽妙洒脱な言い回しで当地方の大根の立派さを表現した作品ですが、この作品から、大根生産で大いに賑わった頃の郷土へ思いを馳せる人も少なくないことでしょう。

筆者の吐句一樓とは、郷土史家としてその名を知られている故森徳一郎（1885～1972）の雅号です。徳一郎は丹羽郡浅野村（現市内大字浅野）の味噌醬油製造業の家に生まれ、地元では「森とくさ」の愛称で呼び親しまれています。徳一郎と郷土史との関わりは、20代後半の明治末年のことで、以来、多数の著作を残しています。主なものを記せば、『浅野荘と浅野氏』、『尾張大根切干発達史』、『一宮市史』、『尾西織物史』、『宮田用水史』、『一宮市史 西成編』、『起町史』などです。そのほか、浅野史蹟顕彰会や安藤秋三郎の創設した「興民義塾」への関わり、また、大正末年の馬見塚遺跡およびその後の萩原町二タ子遺跡の発見などでも知られ、彼の郷土史家としての仕事は枚挙にいとまがありません。

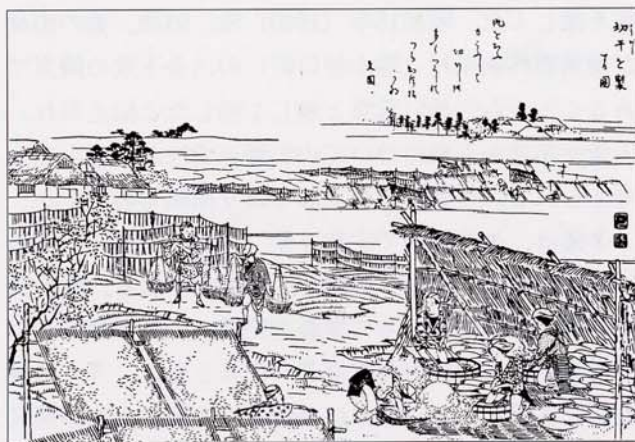
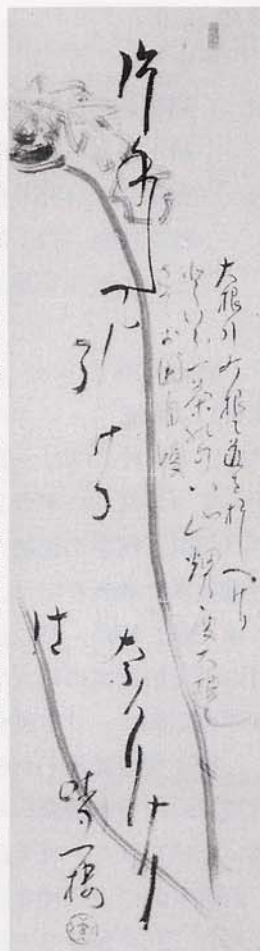
『尾張大根切干発達史』が出版されたのは、昭和10年（1935）、森徳一郎51歳の時の仕事であり、上記の作品もその頃の作と思われます。

まだ大根切干が各農家の現金収入の代表だった頃です。一宮・稲沢を中心とする尾西地方はその一大生産地で、盛期には全国の8～9割方を出荷していたといえます。

大根切干とは、大根を細切して乾燥したもので、多くは宮重大根（青首大根）を用いていました。江戸時代からすでに様々な文献にも記載され、尾張名産品として著名でしたが、明治に入ると飛躍的に発達し、明治32年（1899）には尾張大根切干同業組合が設立されています。この地方でその生産が盛んになったのは、大根が育つのに適した木曾川扇状地の良質な土壌と、「伊吹嵐の寒晒し」、つまり乾燥してしかも冷たい風を運ぶ伊吹嵐とが好条件をつくっていたのです。昭和15年（1940）の写真からその当時の盛んな様子を想像することができますが、大戦後は、連作障害や他地方への技術移入などで衰退に向かっていきました。

昭和61年、博物館の開館準備に際して、市内各地を調査する機会がありましたが、北小淵・萩原町・丹陽町などの農家の方が、12月の終わりから1月の寒風吹きすさぶ中を一斉に作業している光景に出会ったときには、以前に比べて激減しているとはいうものの、かつて尾張地方の風物詩といわれた様をかいま見るような気がしました。しかし、現在この地で生産されている切干は「角切」と呼ばれるもので、ほとんどが九州

▶森徳一郎筆 紙本墨書 一三三・七×三〇・六センチメートル



▲切干を製する図『尾張名所図会』後編 明治13年刊



▲三ツ井 昭和15年『新編一宮市史・本文編下』による



▲北小湊 昭和62年



▲花井方 昭和61年



▲時之島 昭和62年

地方へ出荷されます。豚肉と一緒に煮ると旨いのだそうです。そして、かつて大量に生産され、われわれの食卓に上ることの多かった切干は、角切の1/4ほどの太さのもので「千切」と呼ばれ、現在の生産地はおもに九州の宮崎地方です。干し上がるのに千切よりも時間がかかる角切をこの地方で生産するということは、本来この尾張の気候こそが切り干しに向いているということがいえます。

大根は他の野菜に比べて栄養価が高く、生大根を8%程に干し固めた切干はそのエキスといえるもので、古来様々な調理法で人々に親しまれてきました。『大根切干発達史』尾崎久弥序に、「大根は、下手役者の悪口と謂ふ勿れ、之を叫んだ或百姓は、賞めたつもりだったといふ咄あり。大根の性能、萬善萬能をもて思へば、くさしたるに非ず、賞めたる也。」とあります。今一度、先人の遺した名産品を見直してみてもいいでしょうか。

博物館では、常設展示室1の民俗資料を並べたコーナーの一角に、かつて一大生産地であったことを示す生産道具が陳列してあります。特許製品である4連刃の大根衝器(しょうじき)、大人一人が寝そべることができるような大きなザル、それらの道具が実際に使われていた昭和15年当時の写真も併せて展示されていますので昔の様子がお判りいただけると思います。また、学習室の映像コーナーには、現在の切干生産から出荷までを収録したビデオがありますのでそちらも参考にしてください。

最後になりましたが、多忙なお仕事を撮影・取材などに快くご協力いただきました皆様には、紙上をもちまして厚くお礼申し上げます。

【博物館講座】

古文書講座開講

博物館では、平成元年度から繊維講座や各種体験学習を開催してきましたが、今年度から新たに、一般市民の方を対象に「古文書講座」を開講しました。

内容は江戸期の一宮地方の庄屋文書を中心とした史料講読、およびその歴史的背景に関する学習で、江戸時代の古文書を読むことにより、郷土の歴史についての認識を深めていただくことを目的とするものです。



【これからの博物館】

博物館講座「一宮の歴史を語る」

一宮市博物館は昭和62年11月13日に開館しましたが、その建設の契機となったのは、昭和35年に開始され同63年に終了した新編一宮市史編さん事業です。この度、開館5周年を記念して、多年編さん事業に携わった先生方を講師として、下記の講座を開催します。

- ① 5.2.14 「語り継ぎ、言い継ぎ行かん」
講師 東海学園女子短期大学教授・
前一宮市博物館長 岩野 見司氏
- ② 5.2.21 「壬申の乱と尾張・美濃」
講師 南山大学教授 新井喜久夫氏
- ③ 5.2.28 「尾張藩と村々」
講師 国立歴史民俗博物館名誉教授
塚本 学 氏

時間／各々午後1：30～3：30 場所／一宮市博物館
講座室 聴講料／常設観覧料と共通

平成5年度第1回企画展

「埋蔵文化財出土品展92」

会期 5.4.24～5.30 (予定)

この展覧会は、1992年に実施した、萩原中学校河田遺跡、法圓寺中世墓、尾張病院山中遺跡の発掘調査の出土品を展示し、その成果を示すものです。

萩原中学校河田遺跡では、弥生時代末期の方形周溝墓や中世の溝、土壇が検出され、方形周溝墓の溝からは、銅鏃や高杯、S字甕が出土しています。

法圓寺中世墓は、昨年度に続く発掘調査で、方形区画をもった積石墳墓を検出し、この中世墓の範囲や規模を確認できました。瀬戸焼、常滑焼の蔵骨器や、石製五輪塔、石製宝篋印塔、石仏などが出土しています。

尾張病院山中遺跡では、期待された弥生時代の遺構は検出できませんでしたが、古代の井戸遺構や、中世の溝、土壇を検出しています。

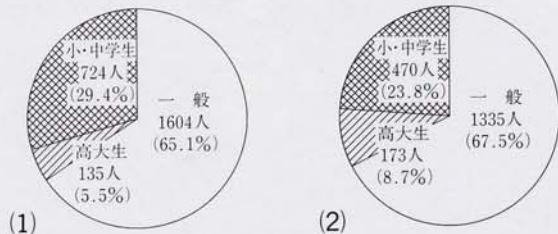


【博物館日誌 (抄)】 (4.8.1～12.31)

- 4.7.18～8.30 企画展「土の音を楽しむー土鈴」
- 4.8.2 博物館講座
「親子博物館めぐり (三州足助屋敷・
足助資料館・トヨタ博物館)」
- 4.8.4～8.7 博物館実習生受け入れ
- 4.8.23 博物館映画劇場
「愛知の伝統産業 (有松・鳴海絞り)、
同 (豊橋筆)」
- 4.9.23 博物館映画劇場
「愛知の伝統産業 (七宝焼)、
同 (守口大根と守口漬)」
- 4.10.10～11.8 企画展「織りの流れを探る」
- 4.10.18 講演会「紡織具の歴史」
講師 関西大学経済学部教授 角山幸洋氏
- 4.10.25 博物館講座「史跡散策 (博物館・妙興寺・
甘酒祭・稲荷山古墳)」
- 4.11.8 山野の植物カラムシの糸づくり
実演 中川好・中川昌・脇田節子氏
- 4.12.12 博物館講座
「縄文時代の布に挑戦ー編布をつくろう」
- 4.12.23 博物館映画劇場「周防猿まわしの記録」

【展覧会開催中の入館者数】

- (1) 企画展「土の音を楽しむー土鈴」
7/18～8/30 入館者数 2,463人/38日
- (2) 企画展「織りの流れを探るー古墳時代までを中心に」
10/10～11/8 入館者数 1,978人/25日



【ご来館有難うございました】 (4.8.1～4.12.31)

一宮市社会福祉協議会浅井支会・名鉄団地有志会・稲沢文化サロン・豊田市民芸館・ガールスカウト愛知県第56団・岐阜東教区寺庭婦人会・游魚俳句会・大和南中学校・市民部健康管理課・一宮市観光協会・中部中学校・平和町社会福祉協議会・浅井中学校・北部中学校・大志小学校・岡崎市保育園連絡協議会・愛知親和会一宮地方会・東宮重子ども会・丹陽老人いこいの家・鈴鹿市納税貯蓄組合役員・一宮市老人クラブ連合会

一宮市博物館だより 第15号

平成5年2月13日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

TEL 0586-46-3215

FAX 0586-46-3216